大将のいましめ

徳川家康

大将というものは
敬われているようで　その家来に
絶えず落ち度を探られているものだ
恐れられているようで侮られ
親しまれているようで疎んじられ
好かれているようで憎まれているものじゃ

大将というものは
絶えず勉強せねばならぬし
礼儀もわきまえなければならぬ
よい家来をもとうと思うなら
わが食へらしても家来に
ひもじい思いをさせてはならぬ
自分一人では何も出来ぬ
これが三十二年間つくづく思いしらされた
家康が経験ぞ

家来というものは
禄でつないでならず　機嫌をとってはならず
遠ざけてはならず　近づけてはならず
怒らせてはならず　油断させてはならぬもの
「ではどうすればよいのだ」
家来には惚れさせねばならぬものよ

徳川家康が死ぬ直前に書いたという
「大将のいましめ」